

愛知県の縄文遺跡（1）

尾張北部地域について

● 川添和暁

愛知県内の縄文時代遺跡について、尾張地域・西三河地域・東三河地域の三地域に分けてみていきたい。その第一回目として尾張地域を取り上げる。この地域は、周辺地域に比べて縄文時代の遺跡が決して多い方ではない。しかし、近年、沖積平野上の縄文遺跡の発見がいくつかあり、また洪積台地上でも新たに縄文時代の遺跡の調査がなされている。ここでは、最近報告書が刊行された一宮市三ツ井遺跡と、発掘調査がなされた名古屋市牛牧遺跡を中心に、特に尾張北部地域について遺跡の様相を観察し、若干の考察を加えていく。

1. はじめに

愛知県内には、県北西部に広大な沖積地である濃尾平野、県東部には丘陵から山地、その中間に洪積台地が広がっている。また県南部は丘陵部の多い知多半島・渥美半島が海に張り出して、伊勢湾・三河湾を形成している。このような様々な立地条件にて発見される遺跡の理解は、一筋縄でいくものではない。ここでは（1）尾張地域・（2）西三河地域・（3）東三河地域に分けて、それぞれの地域で最近発掘された資料に基づいてみていこうと思う。

今回はその第一回として尾張地域を取り上げてみたい。この地域は、西三河地域と東三河地域と比較すると、発見されている縄文時代の遺跡数としては少なめである。また、縄文時代の遺物や遺構が発見されたとしても、断片的である場合が多く見られる。それでも最近の発掘調査によって、縄文時代の遺構・遺物の存在が明らかになった遺跡がいくつか報告されている。特に、遺物の表面採集などでは捉えきることが難しい濃尾平野や河川付近などの沖積地にておいて注目されるべき成果がみられる。今回は尾張地域のなかでも、特に尾張北部地域の遺跡について検討をしていきたい。そこで、最近発掘報告書が刊

行された一宮市三ツ井遺跡と、発掘がなされた名古屋市牛牧遺跡を中心に見ていくこととする。

2. 三ツ井遺跡の概要

三ツ井遺跡は、平成8・9年度に調査が行われ、平成11年度に本報告がなされている（田中編1999）。ここでは報告に沿って遺跡の概略を見ていく。

遺跡は、濃尾平野北部、青木川と五条川に挟まれた標高7～8mの自然堤防と後背湿地上に立地している（第1図）。学史的に著明な馬見塚遺跡からは南東2.5kmの位置に、最近後期の竪穴住居が検出された権現山遺跡（大崎・早野1998）からは北北西1kmの位置に、晩期の竪穴住居が検出された岩倉城遺跡（松原編1992）からは西へ3kmの位置に立地する。

縄文時代から中世にかけて、多少の断絶はあるもののほぼ継続して営まれていたようである。中世の島畑・古墳時代の包含層・弥生時代の包含層など、幾重にもシルトの互層が見られる下に、縄文時代の包含層である黒色粘土質シルト層が表土下120cmから200cmのレベルに存在していた。縄文時代の遺構・遺物は、後期前葉から晩期中葉までの時期に収まるようである。遺跡内のあり方から、それは後期前葉と後期中葉から晩

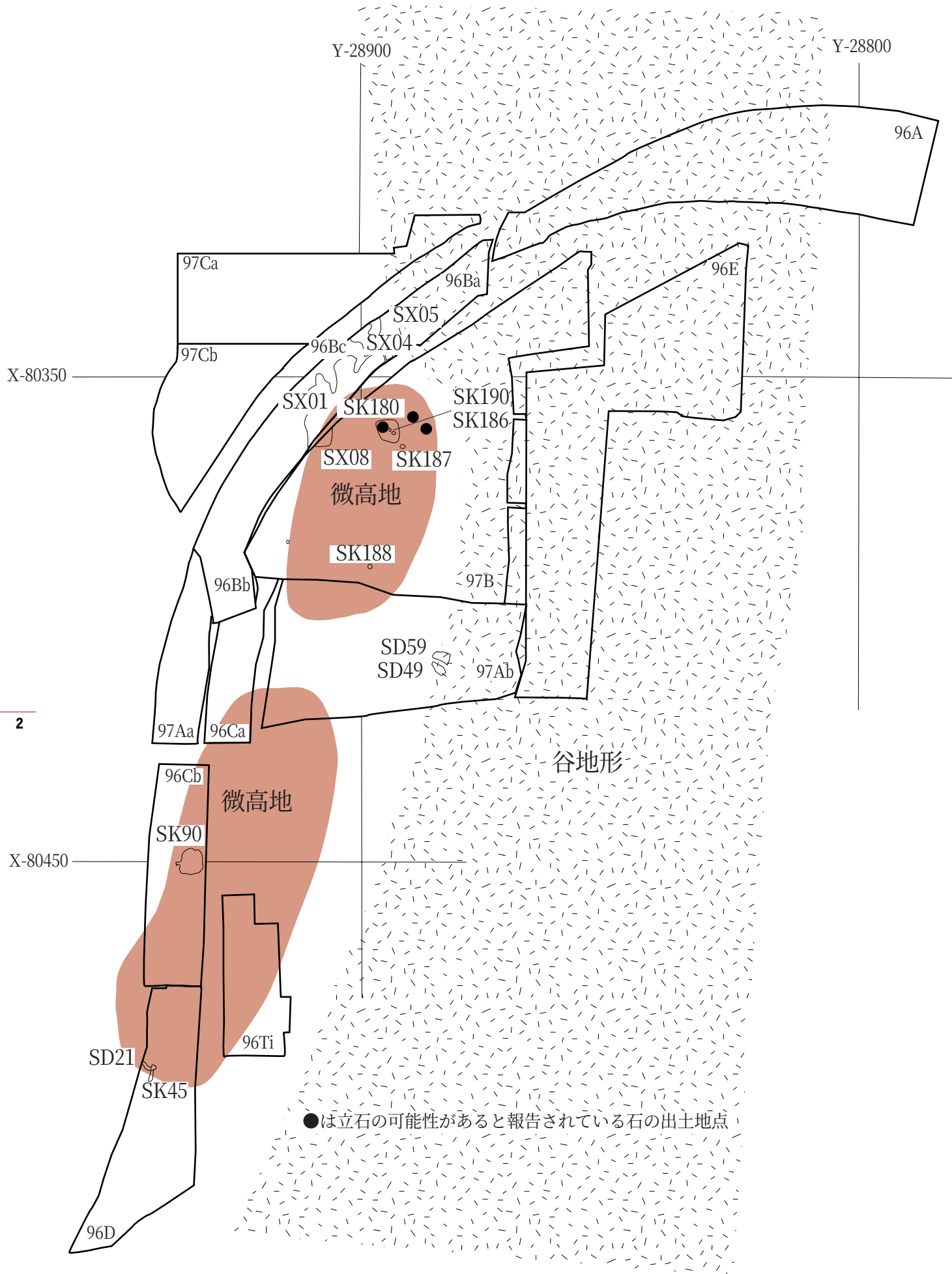


図1 ミツ井遺跡縄文時代遺構配置図（1：1,000）※田中1999より加筆作成

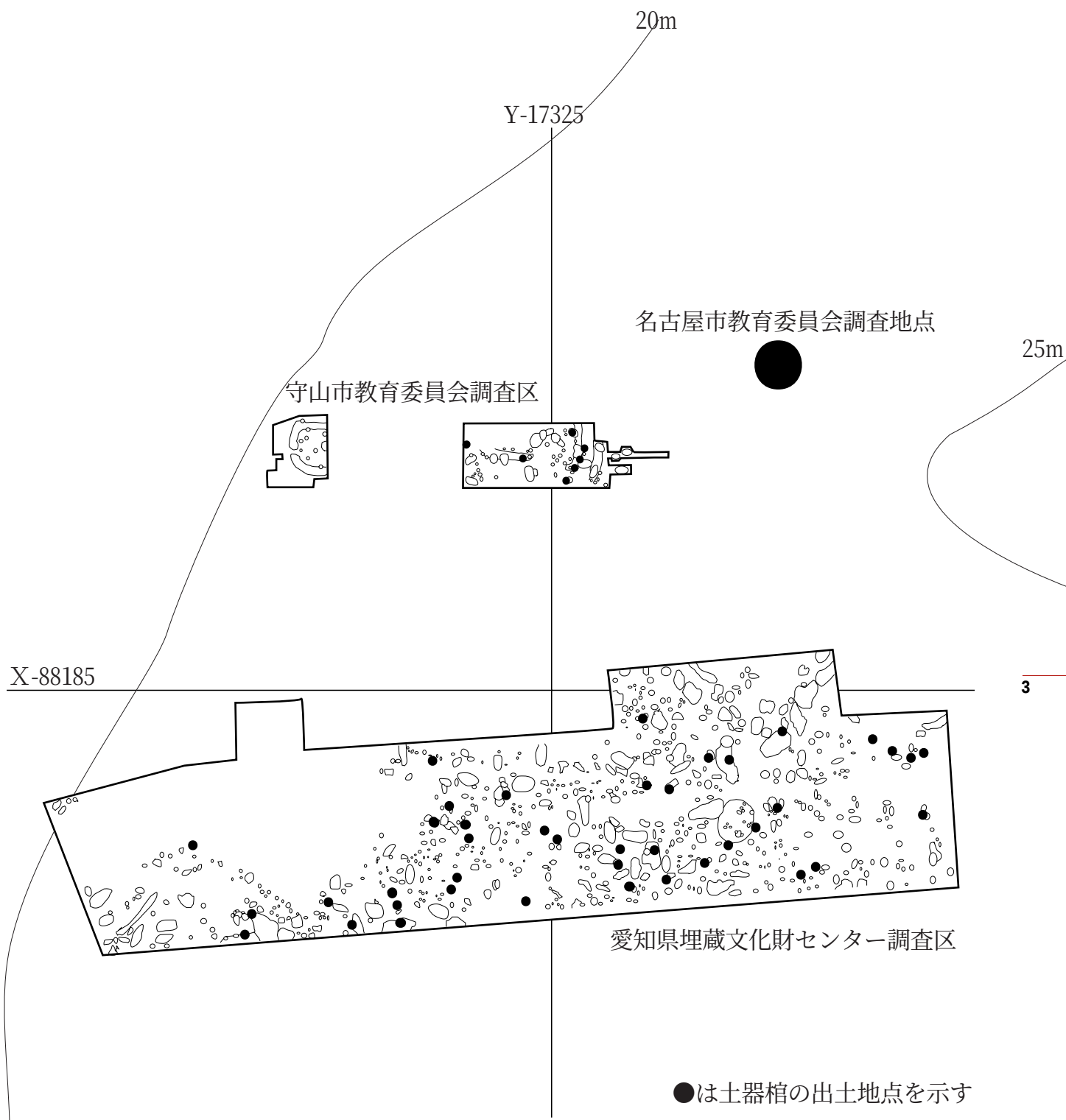


図2 牛牧遺跡縄文時代遺構配置図 (1:500)

期中葉との二時期に分けられている。後期前葉の遺構・遺物は97B区の微高地上およびその周辺という、ごく限られた場所で見られたようである(第1図)。遺構は土坑群が検出されているが、人為的に運ばれてきたとされる細長い大きな自然石が4点出土しており、立石であった可能性が報告されている。一方、後期中葉から晩期中葉の遺構・遺物も97B区の微高地上を中心としているようである。確実にこの時期とされているものは溝状遺構や小土坑群などである。

以上が報告書からの要約である。第1図のように、縄文時代の遺構は主に北の微高地上から検出されている。それが弥生前期になると南の微高地上に遺構の中心が移ってくるようである。もしかしたら南の微高地上にももうすこし縄文時代の遺構がかつては存在していたのかもしれない。

3. 牛牧遺跡の概要

牛牧遺跡は、庄内川と矢田川とに挟まれた、熱田層相当の守山面上に立地している。標高は21～22mで、庄内川に向かって傾斜する、台地の縁辺部に位置している。

この遺跡は、1950年代末に守山市教育委員会によって2度(伊藤ほか1961)、1961年に名古屋市教育委員会(内山1969)、1999年に愛知県埋蔵文化財センターによって調査が行われている^{*1}。

遺跡は、台地縁辺部に沿って、北東から南西方向にわたって広がっている表土および旧耕作土の下は、黒色土(縄文時代晩期の遺物包含層・約30cm)・茶褐色土(約10cm)・明黄褐色礫層(守山面)である。台地の縁辺部に近くなればなるほど、茶褐色土がなくなり、明黄褐色礫層のうえに直接黒色土がのる場合があるようである。弥生時代・古墳時代などの遺構もみられるものの、縄文時代後期末から晩期後葉にかけてが時期の中心であり、この間は、継続して営まれたようである。遺構の中心は土器棺墓群であり、守山市教育委員会調査時の7基、名古屋市教育委員会調査時の1基、愛知県埋蔵文化財センター調査時の

41基を合わせて、計49基が確認されている。それ以外にもこの時期の遺構として、住居跡や土坑群、ピットなどが数多く検出されており、縄文時代の集落の調査例として、注目される(第2図)。

4. 二遺跡からみえる、尾張北部の縄文遺跡について

次に、この地域の縄文時代遺跡の分布を見ていきたい(第3図)。この地域の縄文遺跡の分布については、名古屋市内に関して、伊藤正人氏によって遺跡の立地する土地条件より3つに分類されている(伊藤・川合1993)。それによると、名古屋市の地形は、(1)東部の丘陵地、(2)中央部の洪積台地、(3)その周辺の沖積平野に分けられ、遺跡のほとんどは(2)および(1)に位置しており、(1)に位置している遺跡はごくわずかである、と述べられている。この地形分類は、ほぼそのまま尾張北部について当てはめることができる。ただし、(2)に関して、名古屋市の場合は熱田層台地もしくはそれに相当する中位段丘上がほとんどであるが、名古屋以北では北替地遺跡や織田井戸遺跡などのように下位段丘上に立地するケースが多い。また、(3)にも遺跡の立地がみられ、自然堤防上か、その付近に立地している。特に岩倉市から一宮市南部にかけての青木川水系から五条川水系にかけて多くみられ、三ツ井遺跡や権現山遺跡などから、本格的に遺跡が形成されはじめたのは後期に入ってからである。また、朝日遺跡から後期堀之内Ⅱ式の貯蔵穴が検出されたり、松河戸遺跡にて中期後半から後期前葉の遺構群がみられるなど名古屋台地の北側沖積地でも遺構の検出がみられる(神谷編1989)。

この地域にて、縄文時代を主体とする遺跡は、極めて少ない。それでも遺構がわずかでも検出されている遺跡を縄文時代の遺跡として列挙すると第1表のようになる。現在、遺構の検出が確認できている遺跡は36遺跡あり、貝層が最も多い⁽²⁾。それも半数以上の25遺跡が名古屋市内の遺跡である。名古屋市内の縄文遺跡は、(2)の

^{*1} 1999年愛知県埋蔵文化財センターの調査概要については、『年報平成11年度』に掲載予定である。

^{*2} 貝塚の貝層部分は、何かの人為的な作用が働いた結果、形成されたものである。従って、ここでは遺構の一つとして貝層を考えていきたい。

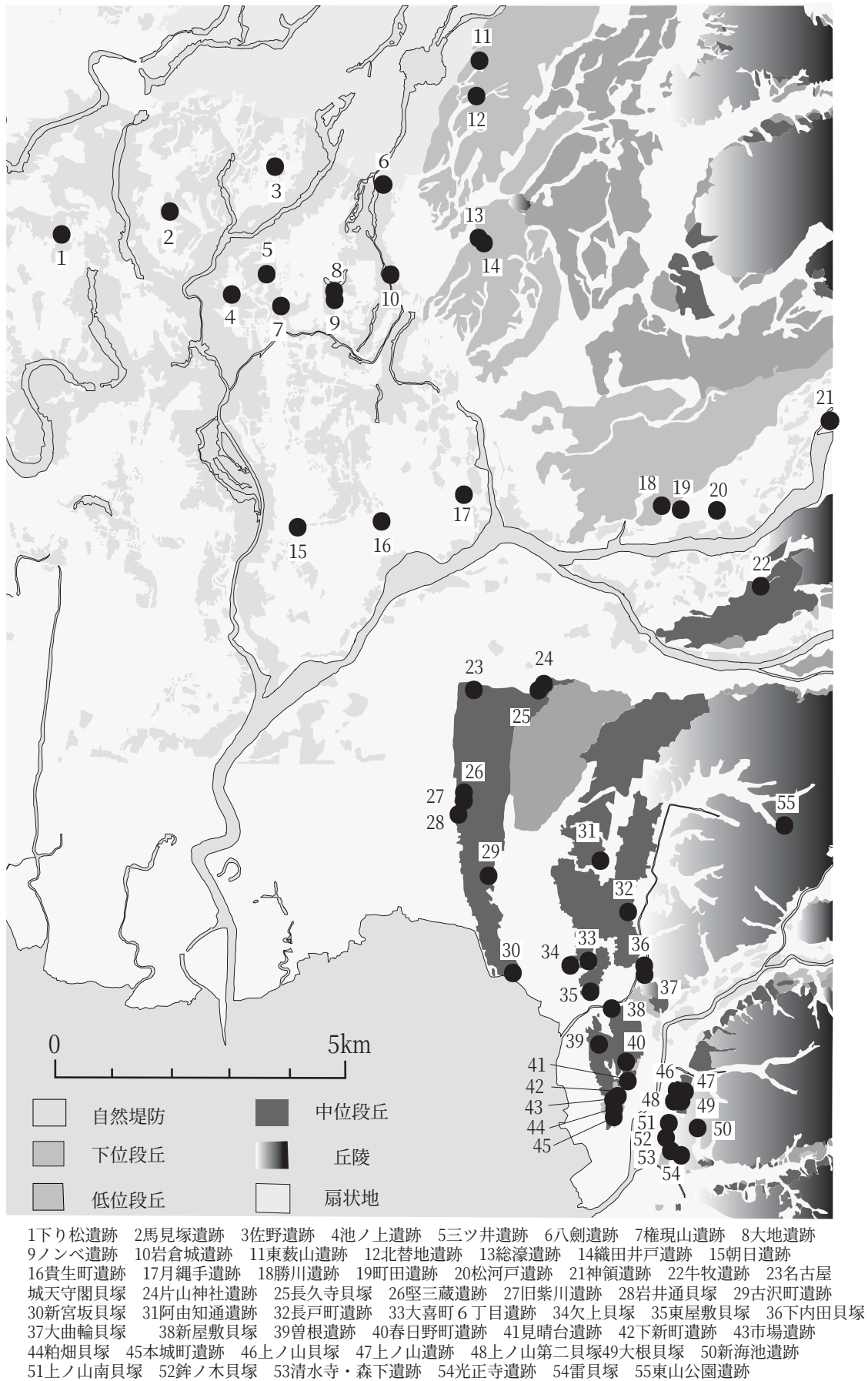


図3 尾張北部の主要縄文時代遺跡分布図（1：100,000）

洪積台地に立地しているものがほとんどである。

この地域の縄文遺跡は、1.沖積地の自然堤防などの微高地上に立地している遺跡、2.洪積台地上に立地している遺跡にほぼ分けられる。1に関して、現在のところ庄内川水系と五条川・青木川水系にて遺構の確認がなされている。沖積地に立地している遺跡に関しては縄文海進・海退と、河川の氾濫・洪水などの土砂の堆積とによって分かりにくいものになっている。濃尾平野の縄文海進・海退に関しては、海津正倫氏が次のようにまとめている（海津1994）。縄文海進によって内湾が最も拡大したのが縄文早期末から前期にかけてである。その後中期に若干の海水準低下があったものの、後期頃に再度の海進があった。そして、後期後半以降、また若干の海水準低下がみられる。1の遺跡群は中期の海水準低下の後、後期の再海進にて海水が侵入してきたか否かによって、遺跡の形成に違いが生じているのではないのだろうか。2に関しては、名古屋市内の遺跡とそれ以北とで違いが見られる。前者は、ほぼ熱田層もしくはそれに相当する中位段丘に遺跡が立地している。一方、後者は、下位段丘上にも遺跡が形成されている。これは、1と同様に後期以降の再海進の影響であろう。1の後期の再海進を受けていない遺跡の例として三ツ井遺跡を、2の中位段丘上に立地している遺跡の例として牛牧遺跡をあげることができる。

5. 今後の課題

西日本の縄文遺跡の立地条件として、沖積平野を取り上げ、遺跡形成の要因を考察されたのは、渡辺 誠氏や泉 拓良・亀井節夫両氏である（渡辺1975、泉・亀井1985）。そして、尾張北部地域にては、春日井市町田遺跡にて、春日井市の沖積地遺跡に関して、考察がなされている（神谷編1989）。この地域の縄文遺跡の立地条件は、端的には「西日本的」ということになるのだろう。しかし、それらの遺跡のなかには、縄文海進・海退というプロセスにより、遺跡の形成前・後に影響を受けているのかどうかをも検証する必要も

あるだろう。また名古屋市内の場合は、熱田層、もしくはそれ相当の中位段丘上に立地している場合がほとんどであり、今後その中で、遺跡間相互の関係を構造的に説明できてくるかもしれない。

また今回は取り上げなかったが、この地域は濃尾平野北部周辺部、岐阜県側とも関連して考察されなければならないであろう。現在発見されている遺跡は、岐阜市側から各務原台地方方向へかけての下位段丘以上など、低地部周辺の段丘上がほとんどである。沖積地に遺跡が知られている例はあまり多くないようであるが、岐阜市の西野々遺跡や龍門寺遺跡のように丘陵部ふもとの自然堤防・扇状地上に立地している場合もわずかながらみられる。これらの遺跡では縄文中期および晩期の土器が出土していることから、尾張北部の自然堤防上の遺跡との状況に類似している可能性がある。

いずれにしてもこの地域は、縄文時代の遺跡としては、他地域と比べても、決して資料が豊富にあるとは言えない。その中で、特に最近調査がなされた、三ツ井遺跡・権現山遺跡・岩倉城遺跡は、資料的な空白を埋める意味でも重要であり、牛牧遺跡は、同時期の遺跡である馬見塚遺跡や雷遺跡・大曲輪貝塚などとの関係をも考慮して、それらにより縄文時代晩期の集落様相の解明に近づけられるであろう。

遺跡名	遺構の種類（時期）	特記事項	文献
馬見塚遺跡	ピット・炉跡・土器棺（晩期）	ピットからは焼けた人骨片	岩野1970
三ツ井遺跡	土坑（後期・晩期）		田中編1999
西山神B遺跡	炉跡（中期後葉）	土器が埋設されている石囲い炉	宮川1981
権現山遺跡	竪穴住居跡（後期）		大崎・早野1998
岩倉城遺跡	竪穴住居跡（晩期）		松原1992
西北出遺跡	溝状遺構、貯蔵穴（後期中葉）	貯蔵穴からカシ・シイの実、	大参1978
織田井戸遺跡	住居跡（早期）		中嶋1983
朝日遺跡	ピット（後期前葉）		渡辺1989 石黒編1991
神領遺跡	竪穴住居跡・土坑(中期後葉)	竪穴住居跡から石囲い炉	浅田・高橋1998
松戸河遺跡	土坑(前期)・中期後半から後期前葉の遺構群		赤塚1994
大六遺跡	土器棺（晩期前葉）		宮石ほか1963
二之輪遺跡	土器棺（晩期）		名古屋市博物館1984
牛牧遺跡	土器棺・住居跡・土坑など（晩期前葉から後葉）		伊藤ほか1961 内田1963
長久寺貝塚	貝層（中期後半）		安達1997
名古屋城天守閣貝塚	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
岩井通貝塚	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
片山神社遺跡	炉跡（中期末）	屋外炉	伊藤・川合1993
古沢町遺跡	溝状遺構		吉田・和田1971
欠上貝塚	貝層・炉跡	埋設土器の存在	小栗1941 伊藤・川合1993
下内田貝塚	住居跡（前期・晩期）・炉跡・ 貝層（前期）・埋葬人骨・土器棺（晩期）		安達1997
大曲輪貝塚	貝層・人骨・住居跡（早期後葉）		伊藤・川合1993
瑞穂遺跡	住居跡（中期末）		服部1987
田光遺跡	竪穴遺構（晩期）		伊藤・川合1993
東屋敷貝塚	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
新宮坂貝塚	貝層（早期後葉・前期）		伊藤・川合1993
上の山貝塚	貝層・ケルン状の焼礫遺構（早期後葉）		伊藤・川合1993
大根貝塚	貝層（前期前半）		森1978
銚ノ木貝塚	貝層（前期前葉）		増子1976
光正寺貝塚	貝層（前期末）		増子1976
雷貝塚	貝層・埋葬人骨		安達1997
氷上貝塚群	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
斎山貝塚群	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
新屋敷貝塚	貝層（早期末から前期初頭）		伊藤・川合1993
見晴台遺跡	貯蔵穴（晩期）	堅果類	伊藤・川合1993
粕畑貝塚	貝層（早期後葉）		吉田・杉原1937
清水寺・森下遺跡	住居跡（中期後葉）		伊藤・川合1993

表1 尾張北部地域縄文時代遺構一覧表

参考文献

- 赤塚次郎編 1994 『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 浅田博造・高橋健太郎 1998 『平成9年度 神領遺跡発掘調査概要報告書』春日井市教育委員会
- 泉 拓良・亀井節夫 1985 「北白河追分町縄文遺跡の調査と意義」
『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』207～208頁京都大学
- 安達厚三 1997 「縄文時代」『新修 名古屋市史1』45～165頁名古屋市
- 石黒立人編 1991 『朝日遺跡Ⅰ』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤敬行・内山邦夫ほか 1961 『牛牧遺跡』守山市教育委員会
- 伊藤正人・川合 剛 1993 『特別展 名古屋の縄文時代 資料集』名古屋市見晴台考古資料館
- 岩野見司 1970 『新編 一宮市史 資料編一』一宮市
- 内山邦夫 1969 「牛牧遺跡の第三次調査」『守山の古墳』調査報告第二. 129～132頁名古屋市教育委員会
- 海津正倫 1994 『沖積低地の古環境学』東京
- 大崎正敬・早野浩二 1998 「権現山遺跡」『年報 平成9年度』70～73頁（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 大参義一 1978 「東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について」
『名古屋大学文学部研究論集74』1～20頁名古屋
- 小栗鉄次郎 1941 「名古屋市昭和区大曲輪貝塚及下向井貝塚」
『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告19』9～39頁愛知県
- 神谷友和編 1989 『町田遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 田中申明編 1999 『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 中嶋 隆 1983 『織田井戸遺跡発掘調査報告書』小牧市教育委員会
- 名古屋市博物館 1984 『守山の遺跡と遺物』名古屋市博物館
- 服部哲也 1987 『瑞穂遺跡-第4次発掘調査概報-』名古屋市教育委員会
- 松原隆治編 1992 『岩倉城遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 増子康真 1976 「名古屋市鳴海町鉾ノ木貝塚の研究」『古代人』32. 1～30頁名古屋考古学会
- 宮石宗弘・水野 収ほか 1963 『大六遺跡』瀬戸市教育委員会
- 宮川芳照 1981 「下林遺跡付近の縄文遺跡」『下林遺跡』23～28頁大口町教育委員会
- 森 達也 1978 『尾張天白川流域の諸遺跡』名古屋
- 吉田富夫・杉原荘介 1937 「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究(1)」『考古学』8 -10.439～455頁東京
- 吉田富夫・和田英雄 1971 『古沢町遺跡発掘調査報告書 縄文時代編』名古屋市教育委員会
- 渡辺 誠 1975 『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 渡辺 誠 1989 「朝日遺跡縄文時代貯蔵穴出土の植物遺体」
『年報 昭和63年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター